

2014年11月9日主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書6章43～45節

説教「良い実を結ぶ木」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ルカが集めた主イエスの教えの結びには、いくつかの小さなたとえがつながっています。これらは並行するマタイによる福音書の「山上の説教」にもありますが、両者のねらいは少し違っています。

木とそれが結ぶ実のたとえは、マタイによる福音書では「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとい、あなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である」(マタイ7:15)という言葉から始まっています。彼らがどんな生き方をし、彼らの働きからどんな実が結ばれているかに注意しなさいというのです。ところが、ルカによる福音書では、恐るべき偽預言者のことは一言も語られていません。誰に気をつけよとか、誰が問題だと言うのではないのです。木と実のたとえは、主イエスの御言葉を聞いて生きている弟子たち、他ならぬ私たちのあり方が問う言葉となっています。

誰でも仕事をする人は、少しでもよい成果をあげたいと願って励みます。同じように、信仰生活においても、私たちはよい実を結び、よい証しを立てたいと願います。それは当然のことであり、また期待されていることでしょう。けれども、もしそこで実の出来栄えだけに心奪われたり、少しでも早く実をつけようと焦ったりするならば愚かなことです。周りの人々が注目し評価してくれるのは実の部分でしょう。けれども、豊かに実り、よい実が結ばれるのは、その木がすこやかに成長しているからです。よい木が成長してよい実を結ぶのです。それを忘れて、人々が喜び感心してくれるような実だけを求めることは意味のないことです。そこを間違えると、私たちは人々の目を気にし、人々の言葉に振り回され、人々に取り入ろうとする偽善者の道に陥ってしまいます。クリスチャンらしくあろうと装うことで無理をしてしまうのです。

私たちはよい実を結ぶことを期待されています。よい実を結ぶ者でありたいと願います。けれどもそこで大事なことは、私たちがどのような木であるかということです。実を結ぶということで思い起こすのは、主イエスの語られたぶどうの木のとえです。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れてはあなたがたは何もできないからである」(ヨハネ15:5)。この有名なたとえ話において頻繁に出てくる言葉は、ギリシア語の‘メノー’という単語ですが、「つながっている」、「ある」、「とどまる」と訳されて、10節までの間に13回以上出てきます。これらはいずれも、主イエス・キリストとの結びつきを指しています。主イエス・キリストとの交わりにおいて、私たちは生かされ、清くされ、豊かに実を結ぶのだと約束されています。

木とそれが結ぶ実のたとえは、次に倉とそこから取り出すもののとえに展開し、「人の口は、心からあふれ出ることを語るのである」と結ばれます。この言葉は、マタイに

よる福音書の「山上の説教」ではなく、12章34～35節であらためて語られています。そこでは、主イエスにおいて始まっている神のご支配を認めようとしないうる人々のことを念頭において、悪しき心から出てくる悪しき言葉が批判されています。

しかし、ルカによる福音書ではここでも誰か他の人の悪質な言葉や軽薄な言葉が非難されているのではなく、主イエスに従おうとする弟子たちに向けて、口から出る言葉とその人の心の関係が論じられています。私たちがどんな言葉を語っているかが問われているのです。

私たちの言葉の問題は聖書のいたるところで取り上げられています。とりわけ、ヤコブの手紙は3章で鋭く印象的な警告を語っています。ヤコブは「舌は火です。舌は不義の世界です」(ヤコブ3:6)と舌を制御することの難しさ大切さを語り、次のように言います、「わたしたちは舌で、父である主を讃美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から讃美と呪いが出て来るのです。わたしの兄弟たち、このようなことがあってはなりません。泉の同じ穴から、甘い水と苦い水がわき出るでしょうか。わたしの兄弟たち、いちじくの木がオリーブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができるでしょうか。塩水が甘い水を作ることもできません」(ヤコブ3:9～12)。

神を讃美する口で兄弟を呪う、同じ口から讃美と呪いが出て来る、このようなことはありえないことであり、あってはならないことだというのですが、残念ながら、それが私たちの現実の正直な姿ではないでしょうか。世間の空虚な言葉、憎悪や偏見に満ちたひどい言葉に顔をしかめることはしても、私たちはどれだけ生きた力ある誠実な言葉を口にしていることでしょうか。ここで大事なことは、口先のテクニックではありません。人の口は、心からあふれ出ることを語るのですから、「心の倉」に何が満たされているかが問題です。主イエス・キリストによって罪赦され、主に慰められ、生かされている喜びと感謝が心の倉にたくわえられているところで、私たちは生きたよい言葉を担っていくことができるからです。

パウロは、エフェソの信徒への手紙において、私たちの新しい生き方として、「偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい」と言い、「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」と勧めます(エフェソ4:25～29)。キリストの言葉が心の内に豊かに宿るようにし、聖霊によって讃美と感謝をささげ、私たちが思いにおいても言葉においても行いにおいても、少しでも御心にかなう者となることを願わずにおれません。

(11月9日の主日礼拝説教から)